



Title	原発性上皮小体（副甲状腺）機能亢進症における上皮小体腺腫の病理組織学的研究
Author(s)	Gyanu, Raja Shrestha
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35249
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	ギヤヌ ラジャ セレスタ GYANU RAJA SHRESTHA
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 7 0 5 6 号
学位授与の日付	昭 和 61 年 1 月 6 日
学位授与の要件	医学研究科 外科系専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	原発性上皮小体（副甲状腺）機能亢進症における上皮小体腺腫の 病理組織学的研究
論文審査委員	（主査） 教 授 園田 孝夫 （副査） 教 授 北村 旦 教 授 藤田 尚男

論 文 内 容 の 要 旨

（目 的）

原発性上皮小体機能亢進症（hyperparathyroidism, 以下PHPTと略す）は、本邦での発症頻度 2,400～5,000 人中 1 人であり、稀な疾患とは言い難い。さらに、PHPTの代表的な合併症は尿路結石であり、全尿路結石症の原因に占める本症の頻度は約 2 % と高く、泌尿器科領域で発見される本症の症例は年々増加の傾向を示している。しかし、PHPT症例が増加しているにもかかわらずPHPTを惹起する過機能上皮小体の病理組織学的な診断基準はいまだ確立されているとは言い難く、癌腫、腺腫、一次性過形成の識別は時として困難であることや、腺腫例において組織構築像の多様性に関する検討も系統的には行なわれていない。

そこで、大阪大学泌尿器科学教室において経験した 205 例のPHPT症例のうち、臨床的に腺腫であると診断しうる 105 例の病理組織標本をretrospectiveに検討し、上皮小体腺腫の病理組織構築像の分類を行ない、同時に組織構築像と臨床像に何らかの相関があるか否かについても検討を加えた。

（方 法）

上皮小体腺腫 105 例の摘除標本を、10%ホルマリンにて固定後、パラフィン包埋し、4 μ 薄切片を作製し、hematoxylen and eosin染色後、光学顕微鏡下に観察した。年齢については腺腫摘出時の年齢、また腺腫重量は手術時摘出直後ホルマリン固定前の重量を用いた。血清カルシウム、リンなどの生化学的指標については数回の測定値のうち最も異常な値を示したものについて検討した。

（成 績）

I. 腺腫 105 例の病理組織構築像は以下の 5 型に分類しえた。

- (1) 敷石状配列型——細胞は均一かつ敷石状に密に増殖した配列を示す——68例（64.7％）。
- (2) 索状配列型——細胞は索状に配列し内皮細胞に囲まれた索状構造型は11例（10.5％）。
- (3) 腺房状構造型——細胞が腺房状の小管腔を多数形成しているもので20例（19.0％）。
- (4) 汙胞状構造型——細胞が比較的大きい管腔形成を伴い、管腔内にコロイド様物質の充満しているもの3例（2.9％）。
- (5) 以上の(1)～(4)の各組織構築像の2種以上混在し、いずれの組織型が優位であるか判定し難いもの3例（2.9％）。

II. 病理組織構築像と臨床像との関連

- (1) 各組織像と腫瘍重量を比較したところ、有意差は認めないものの索状配列型の腺腫重量の少ない傾向が認められた。
- (2) 各組織構築像と血清カルシウム値の比較では、敷石状配列群が索状配列群に比して有意に高い血清カルシウム値を示した。
- (3) 組織構築像と年齢、性別についての検討では、敷石状配列群が若年者に多い傾向を示したが、性別については何らの特徴も認められなかった。
- (4) 腺腫105例の重量と血清カルシウム値の比較では、腫瘍重量の増大にともない血清カルシウム高値を示す傾向が認められた。

III. 上皮小体腺腫の構成細胞

腺腫の各種構成細胞は、暗主細胞、明主細胞、好酸性細胞と移行型好酸性細胞より構成され、多くの腺腫は単一細胞成分の増殖によらず上記の数種の細胞成分の混在することが認められた。

(総括)

- I. 上皮小体腺腫の病理組織構築像は、(1)敷石状配列型68例（64.7％）、(2)索状配列型11例（10.5％）、(3)腺房状構造型20例（19.0％）、(4)汙胞状構造型3例（2.9％）、(5)混合型3例（2.9％）の5型に分類可能なことが判明し、腺腫の大部分は敷石状配列群、索状配列群と腺房状構造群によって構成していると考えられる。
- II. 上皮小体腺腫構成細胞は、単一細胞成分の増殖によらず、多数の細胞成分が混在することが多く、特に暗主細胞と明主細胞の増殖により形成された腺腫が多数認められた。
- III. 病理組織構築像と臨床像間に明らかな有意差を示すものは少ないが、若年者の上皮小体腺腫では細胞が比較的すみやかに増殖し、敷石状配列型構築像を呈する傾向があると考えられる。また、腺房状構造を呈する腺腫では老年者が多く、索状配列を呈するものでは腺腫重量が小さく、血清カルシウムも低値でありslow growing tumorである可能性を示唆していると考えられる。
- IV. 以上の知見は同時に上皮小体腺腫と癌腫、一次性過形成の鑑別診断の一助になりうるものと考えられる。

論文の審査結果の要旨

原発性上皮小体機能亢進症のうち、臨床的に腺腫と断定しうる105例の上皮小体摘除標本につき、病理組織構築像を検討した。その結果、敷石状配列型、索状配列型、腺房状構造型、汙胞状構造型、および混合型の5型に分類可能であることが判明した。また、敷石状配列型は若年者に、腺房状構造型は老年者に多く認められ、索状配列型は臨床的に軽症である傾向が認められた。

以上の新知見は学位に値する。